

友情の象徴でもある園満寺(えんまんじ)は、戦争を経て、今でもセバストポールの地域社会で日米友好のための重要な役割を果たしている。

一つ屋根の下

今から30年前、旧山内町では、地球市民の会という佐賀県内の支援団体の協力で、将来を見据えて国際交流に取り組む方針が決まった。

一方セバストポールには、日系人たちの特別な友情の歴史があった。第2次世界大戦中、アメリカ西海岸に住む日系人12万人が、敵国人であるという理由で、アメリカ政府によって強制的に収容所に送られた。その多くは戦後、根強く残る人種差別のため、収容前に住んでいた土地に戻る事ができなかった。

しかし、セバストポールでは、地元の市民が日系人の土地や家畑を守りながら待つてくれたというのである。

「人種も地域も越えて誰でも歓迎し、家族のような人たちが増えれば、戦争は二度と起きない。」そんなセバストポール市民の思いが、交流都市を探す旧山内町と引き合わせたのだ。その思いは、国際交流を担うセバストポールワールドフレンズの活動に脈々と受け継がれている。

「この街への恩返しの意味も込めて、交流に参加する一人でも多くの方に、手を差し伸べていきたいのです。」セバストポール市に在住してからこの取組を知り、今ではその一員として、交流に広く携わっている水谷めぐみさん、典彦さん夫妻はそう語る。

典彦さんはセバストポール高校に留学した経験があり、夫婦で移住してからも日本人の自分たちを「家族」として受け入れてくれたセバストポール市、この市への感謝と誇りと平和への思いを、両市の子ども達へ伝えたいのだと言う。

セバストポール市民の寛容な心の温かさが、本当にこの街全体に根付いていることをご夫妻は教えてくれた。その思いは今日までずっと変わっていないと。